資治通鑑　第 127 巻

令和 3 年 9 月 1 日

【宋紀九】　昭陽大荒落，一年。

■宋、●北魏、（続国訳漢文大成．経子史部 第 7 巻 319p）

太祖文皇帝下之下、元嘉三十年（癸巳，４５３年）

■春，正月，戊寅（４日），南譙王の**義宣**を以て司徒、揚州刺史と為す。

■［蕭道成武都を攻め、難きを知りすぐ退く］**蕭道成**（斉王朝の初代皇帝）等は氐、羌を帥いて魏の武都（甘粛省渭川道武都県、現・隴南市武都区、北魏 440 年までは慶陽市鎮原県が武都）を攻め，魏の高平の鎮將の**苟莫**は突騎二千を將して之を救う。**道成**等は引いて南鄭（宋の梁州南秦州二州刺史の治所、胡三省いわく「兵志に所謂難きを知りて退くとは蕭道成有り」）に環る。

■壬午（８日），征北將軍の始興王の**濬**を以て荊州刺史と為す。**帝**の怒りは未だ解けず，故に**濬**は久しく京口に留まる。既に荊州に除し，乃ち入朝を聽す。

■戊子（１４日），江州刺史の武陵王の**駿**に詔して諸軍を統べて西陽蠻を討たしめ，五洲（湖北省江漢道蘄水県、現・黄岡市蘄水県、武漢南東の揚子江中）に軍す。

■［嚴道育の東宮隠匿の波紋］**嚴道育**の亡命する也，**上**は使者を分けて遣わして搜（索逮）捕は甚だ急なり。**(7-320p) 道育**は服を變じ尼に為り，東宮に匿れ，又た始興王の**濬**に隨いて京口に至る。或は出でて**民張晤**の家に止まる。**濬**が入朝するや，復た載せて東宮に環り，俱に江陵に往かんと欲す。

丁巳（二月？１４日），**上**は軒に臨み，**濬**は入りて拜（荊州刺史の任命）を受く。是の日，

「**道育**は**張晤**の家に在り」

と告げる者有り，**上**は遣わして掩（不意に）捕せしめ，其の二婢を得，雲く

「**道育**は征北（將軍の濬）に隨いて都に還る。」

上は**濬**と太子の**劭**は已に**道育**を斥（退ける・斥候）遣したと謂う，而るに其の猶ほ與に往來するを聞き，惆悵（恨み嘆き）惋駭（恨み驚く）し，乃ち京口に命じて二婢を送らしめ，至るを須ちて檢覆（反復して調べる・捜査）し，乃ち**劭**、**濬**の罪を治せんとす。**潘淑妃**は**濬**を抱いて泣いて曰く、

「汝は前に祝詛の事發われ，猶ほ能く意を刻し慾ちの思わんを冀う。何の意か更に**嚴道育**を藏すか！**上**は甚だ怒り，我は叩頭して恩を乞うも解く能わず，今何の生を用いると為すか！藥（毒薬）を送って來る可し，當に先ず自ら取り盡くす（自殺）べし，汝の禍に敗るるを見るに忍びざる也。」

濬は衣を奮わして起って曰く、

「天下の事は尋いで自ら當に判（判断）じ，願わくは小しく寬慮（配慮し寛いく），必ず**上**に累せず！」

●己未（１６日），魏の京兆王の**杜元寶**は謀反に坐して誅さる。建寧王の**崇**及び其の子の濟南王の**麗**は皆な**元寶**の引く所と為り，死を賜る。

■［太子廢嫡を王僧綽と相談］**帝**は太子の**劭**を廢し，始興王の**濬**に死を賜わんと欲し，先ず侍中の**王僧綽**と之を謀す。**僧綽**をして漢魏以來の太子、諸王の廢する典故（経常の籍と旧事）を尋ねしめ，尚書僕射の**徐湛之**及び吏部尚書の**江湛**に送る。

■［太子廢嫡の議論に躊躇］武陵王の**駿**は素より寵（愛）無く，故に外籓に屢々出で，建康に留まる（澎城から帰りすぐに江州刺史に出る）を得ず。南平王の**鑠**、建平王の**宏**は皆な帝の愛する所と為る。**鑠**の妃は，**江湛**の妹なり。隨王の**誕**の妃は，**徐湛之**（410-453 字は孝源、小字は仙童。父は徐逵之で、母は武帝劉裕の長女の会稽公主劉興弟）

の女也。**湛**は**帝**に**鑠**を立てるを勧め，**湛之**の意は**誕**を立てんと欲す。**僧綽**は曰く、

「建立の事は，聖懐（帝のふところ）に由りて仰ぐべし。臣は謂うに唯だ宜しく速斷すべし，稽緩（遅滞）する可からず。『當に斷じるべくして斷じざれば，反りて其の亂を受けるべし。』義を以て恩を割くを願い，小の忍びずを略すべし（孔子の言、「小忍びざれば大謀を乱る」）。爾らざれぱ，便ち應に坦懐（あっさりと父子天性の）初めの如く，疑論を煩わすこと無かれ。事機は密と雖も，廣く宣すに致るは易く，（禍）難をして慮表（思慮の外）に生ぜ使め，笑いを千載に取る可からず。」

帝は曰く、

「卿は能く大事を斷ずを謂う可し。然れども此の事は重（要）に至り，殷勤に三思せざる可からず。且つて彭城の始めて亡す（義康の死は前巻にあり）。人は將に我に復た慈愛の道無しと謂はん。」

僧綽は曰く、

「臣は千載の後，**陛下**が唯だ能く弟を裁くも，兒を裁く能わずと言うを恐る。」**(7-321p)**

帝は默然とす。**江湛**は同じく侍坐し，閣を出で，**僧綽**に謂って曰く、

「卿が尚の言は將に太いに切直に傷れざらんや！」

僧綽は曰く、

「弟（僧綽は江湛よりも年少の意）も亦た君の直ならずを恨む！」

■<u>［太子廃嫡の議が漏れる］</u>**鑠**は壽陽より入朝し，既に至るも，旨を失う。**帝**は**宏**を立てんと欲し，其の次に非らざる（宏は年歯もいかず後継にならない）を嫌い，是を以て議は久しく決まらず。毎夜**湛之**と人を屏けて語り，或いは連日夕に累す。常に**湛之**をして自ら燭を秉り，壁を繞りて檢行せ使め，竊み聽く者有るを慮る。**帝**は其の謀を以て**潘淑妃**に告げ，**淑妃**は以て**濬**に告げ，**濬**は馳せて**劭**に報ず。**劭**は乃ち密かに腹心の隊主の**陳叔兒**、齋帥（齋内の仗衛を掌り湯沐燈燭清掃も担当）の**張超之**等と逆（謀反）を為さんと謀る。

【建康宮廷クーデター】

■<u>［東宮の兵立つ］</u>初め，**帝**は宗室の強盛なるを以て，內難（兄弟の謀反）有るを慮り，特に東宮の兵を加え（123 巻 16 年にあり），羽林（直轄部隊）と相い若しとせ使め，實甲は萬人を有すに至る。**劭**は性は黠にして剛猛，**帝**は深く之を倚（頼みにする）とす。將に亂を作さんとするに及び，毎夜將士を饗し，或いは親ら自ら酒を行す。**王僧綽**は密かに以て啟聞す。**嚴道育**の婢の將に至らんとすに會う。癸亥（２０日）の夜，**劭**は**帝**の詔なりと詐りて云く、

「**魯秀**が反を謀る，汝は平明に闕を守り，衆を帥いて入る可し。」

因りて**張超之**等をして素より畜養する所の兵士二千餘人を集めて，皆な甲を被ら使む。內外の幢隊の主副を召し，豫め部勒を加え，雲わく

「討つ所有り。」

夜，前の（太子の）中庶子の右軍長史の**蕭斌**、左衛率の**袁叔**、中舍人の**殷仲素**、（東宮の）左積弩將軍の**王正見**を呼びて並んで宮に入る。**劭**は流涕して謂って曰く、

「**主上**は讒を信じ，將に罪を廢せ見れんとす。內に省るに過は無く，枉（無実の罪）を受ける能わず。明旦當に大事を行い，相い與に戮力せんと望む。」

因りて起ち，遍く之を拜す。衆は驚愕し，對ふる能うなし。<u>之久しく（続は無し）</u>，**淑**、**斌**は皆な曰く、

「古より此れ無し，願わくは善思（熟慮）を加えるべし！」

劭は怒り，色を變える。**斌**は懼れ，衆と俱に曰く、
「當に身を竭(つく)して命を奉ずべし。」
淑は之を叱って曰く、
「卿は便(すなわ)ち**殿下**に真に是れ有ると謂(おも)えるかな？**殿下**は幼きとき嘗て風（狂疾、精神疾患）を患ひ，或(あるい)は是れ疾の動く耳。」
劭は愈々怒り，因りて**淑**を眄（流し目）して曰く、
「事當に克つべきや不(いな)や？」
淑は曰く、
「疑われざるの地に居り，何ぞ克たざるを患えんや！但だ既に克ちての後，天地の容れる所と為らず，大禍は亦た旋に（たちまち）至らんを恐れる耳。假(かり)に此の謀が有るとも，猶ほ將に息(や)む可からん。」
左右は**淑**を引いて出で，曰く、
「此くは何事なるや，而るに罷める可しと雲う乎！」
淑は（左衛率）省に還り，床を繞(めぐ)りて行き，四更に至りて乃ち寢る。
■［太子劭の謀反で帝弑逆される］甲子（２１日），宮門未だ開かず，**劭**は朱衣（太子の入朝の服）**(7-322p)**を以て戎服の上に加え，畫輪車（牛に駕し絳漆で輪轂を画く車）に乗り，**蕭斌**と同じく載り，衛從は常の入朝之儀の如し。**袁淑**を呼ぶこと甚だ急にして，**淑**は眠りて起きず，**劭**は車を奉化門（東宮の西門）に停めて之に催すこと相い續く。**淑**は徐(おもむろ)に起ち，車の後に至る。**劭**は車に登ら使むも，又た辭して上がらず，**劭**は左右に命じて之を殺さしむ。門の開くを守り（待ち），萬春門（台城の東門）從り入る。舊の制では，東宮の隊（続は隊從）は（台）城に入るを得ず。**劭**は偽詔を以て門衛に示して曰く、
「敕を受ける，收討する所有り。」
後隊に速かに來たら令む。**張超之**等の數十人は馳せて雲龍門及び齋閣に入り，拔刀して徑(ただち)に合殿（宋書本紀、魏書島夷伝には含章殿）に上がる。**帝**は其の夜**徐湛之**と人を屏けて語りて旦に至り，燭は猶ほ未だ滅せず，門階戸席の直衛兵は尚ほ寢て未だ起きず。**帝**は**超之**が入るを見，幾（続は几、脇息とするが、どちらも可能性在り）を舉げて之に捍さし，五指は皆な落ち，遂に之を弑す（帝は 47 才）。**湛之**は驚きて起ち，北戸に趣き，未だ開くに及ばずして，兵人は之を殺す。**劭**は進みて合殿の中閣に至り，**帝**の已に殂(そ)すを聞き，出でて東堂に坐し，**蕭斌**は刀を執りて侍し，直ちに中書舍人の**顧覬**を呼び，**覬**は震え懼れ，時に出でず，既に至り，問いて曰く、
「共に廢せ見れんと欲するに，何の早く啟(もう)せざりしや？」
覬の未だ答ふるに及ばすに，即ち前において之を斬る。（侍中の）**江湛**は上省（侍中省に上下省あり、禁中にあり）に直し，喧噪の聲を聞き，歎じて曰く、
「**王僧綽**の言を用いず，以て此に至るか！」
乃ち傍の小屋の中に匿れ，**劭**は兵を遣して就きて之を殺す。宿衛の舊將の**羅訓**、**徐罕**は皆な風を望みて屈して附く。左細仗主（宿衛の官の一）、廣威將軍の吳興の**卜天與**は甲を被る暇あらず，刀を執り弓を持ち，疾く左右を呼びて出でて戰う。
徐罕は曰く、
「**殿下**は入る，汝は何を為さんと欲すか！」
天與は罵(ののし)りて曰く、
「**殿下**は常に來たる，雲何(いかん)ぞ今に於いて乃ち此の語を作(な)すか！只だ汝は是れ賊なり！」

手づから東堂の**劭**を射る。幾(ほと)んど之に中たらんとする。**劭**の黨は之を撃ち，臂を斷ちて死す。隊將の**張泓之**、**朱道欽**、**陳滿**は**天與**と倶に戰死す。左衛將軍の**尹弘惶**は怖れて通啟し，處分を受けるを求める。**劭**は人をして東閤（門）より入ら使め，**潘淑妃**及び**太祖**（劭は中宗と廟を号し、後に孝武帝は太祖とす）の親信する左右數十人を殺し，急に**始興王**を召して衆を帥いて中堂に屯せ使む。

■<u>［始興王の濬の招集］</u>**濬**は時に西州に在り，（濬の）府の舍人（晉以来諸王府に舍人は十人）の**朱法瑜**は奔りて**濬**に告げて曰く、

「台內は喧噪し，宮門は皆な閉じ，道上には**太子**の反くを傳え，未だ禍變の至る所を測らず。」

濬は陽(いつわり)（表面上）驚いて曰く、

「今當に奈何(いかん)すべきか？」

法瑜は石頭に入據するを勸む。**濬**は未だ**劭**の信を得ず，事の濟不(せいひ)（成否）を知らず，騷擾の所爲(ゆえん)を知らず。將軍の**王慶**は曰く、

「今宮內に變有り，未だ**主上**の安危を知らず，凡そ臣子に在るは，當に袂を投げて難に赴くべし。城に憑(よ)りて自ら守るは，臣の節にあらざる也。」

濬は聽かず，乃ち南門より出で，遲(ただち)に石頭に向かい，(7-323p)文武の從者千餘人。時に南平王の**鑠**は石頭に戍し，兵士は亦た千餘人。俄にして**劭**は**張超之**を遣わして馬を馳せて**濬**を召し，**濬**は人を屏(しりぞ)けて狀を問い，即ち戎服乘馬して去る。**朱法瑜**は固く**濬**を止め，**濬**は從わず。中門より出で，**王慶**は又た諫めて曰く、

「**太子**は反逆し，天下は怨憤す。明公は但だ當に城門を堅く閉し，坐して積粟（石頭の倉城の食料）を食し，三日に過ぎずして，凶黨は自ら離る。公情事は此くの如し，今豈に宜しく去らんや！」

濬は曰く、

「皇太子の令なり，敢えて復た言う者有れば斬らん！」

既に入りて，**劭**を見る，**劭**は**濬**に謂って曰く、

「**潘淑妃**は遂に亂兵の害する所と爲る。」

濬は曰く、

「此くは是れ下情の由來と願う所なり。」

■<u>［劭即位、太初改元］</u>**劭**は詐りて**太祖**の詔を以て大將軍の**義恭**、尚書令の**何尚之**を召して入るや，內（台內）に拘す。並びに百官を召し，至る者は纔(わづか)に數十人。**劭**は遽(にわか)に即位す。詔を下して曰く、

「**徐湛之**、**江湛**は弒逆して狀無く，吾は兵を勒して殿に入るも，已に及ぶ所無し，崩衄(ほうじく)（鼻血）を號惋(ごうわん)（うらむ）し，肝心は破裂す。今罪人は斯(ここ)に得て，元兇は克殄(こくてん)し，大赦すべし，太初と改元す。」

（元嘉 30 年を太初元年に改元しようとしたが、先君の死去年を越さない改元を蕭斌に反対された。劉劭が僧綽に訊ねると、僧綽は晋の恵帝の前例を挙げて蕭斌に反論したため、劉劭に喜ばれた。）

■即位し畢(おわ)り，亟(すみやか)に疾と稱して永福省（禁中の太子の居所）に還り，敢えて喪に臨まず。白刃を以て自ら守り，夜は則ち列燈して以て左右を防ぐ。**蕭斌**を以て尚書僕射、領軍將軍と爲し，**何尚之**を以て司空と爲し，前右衛率の**檀和之**をして石頭に戍せしめ，征虜將軍營道侯の**義綦**をして京口に鎮ぜしむ。**義綦**は，**義慶**（長沙王道憐の第二子）之弟也。

■乙丑（２２日），悉く先に諸處に給する兵を收め武庫に還し，**江**、**徐**の親黨の尚書左丞の**荀赤松**、右丞の**臧凝之**等を殺す。**凝之**は、**燾**の孫也。**殷仲素**を以て黃門侍郎と爲し，**王正見**を左軍將軍と爲し，**張超之**、**陳叔兒**等は皆な官に拜し、賞賜して差有り。輔國將軍の**魯秀**は建康に在り，**劭**は**秀**に謂って曰く、

「**徐湛之**は常に相い危（前巻 28 年にあり）くせんと欲し，我は已に卿の為に之を除く矣。」

秀をして屯騎校尉の**龐秀之**と與に對して軍隊（軍主隊主の統べる兵）を掌（担当）ら使む。**劭**は**王僧綽**の謀を知らず，**僧綽**を以て吏部尚書と為し，司徒左長史の**何偃**を侍中と為す。

【沈慶之は武陵王駿を挙兵させる】

■［武陵王駿の反撃計画］武陵王の**駿**は五洲に屯し，**沈慶之**は巴水より來て，軍略を咨受す。三月，乙亥（２日），典簽の**董元嗣**は建康より五洲に至り，具に**太子**の殺逆を言い，**駿**は**元嗣**をして以て僚佐に（挙兵の意志を）告げ使む。**沈慶之**は密かに腹心に謂って曰く、

「**蕭斌**は婦人（の様に怯弱），其の餘の將帥は，皆な與し易き耳。東宮と同惡は，三十人に過ぎず。此の外は屈逼し，必ず用を為さず。今順（武陵王駿）を輔けて逆を討つ，濟らざるを憂えず也。」**(7-324p)**

●壬午（９日），魏主は**保太后**（乳母を母となすは礼に背く、前巻前年に見える）を尊して皇太后と為し，祖考に官爵を追贈し，兄弟は，皆な外戚の如し。

■［太子劭の人事］太子の**劭**は浙東（元々揚州に属す）の五郡を分けて會州（會稽に治す）と為し，揚州を省き，司隷校尉を立て，以て其の妃の父の**殷沖**を司隷校尉と為す。**沖**は，**融**（殷融は 94 巻晉の成帝咸和三年にあり）の曾孫也。大將軍の**義恭**を以て太保と為し，荊州刺史の南譙王の**義宣**を太尉と為し，始興王の**濬**を驃騎將軍と為し，雍州刺史の**臧質**を丹陽尹と為し，會稽太守の隨王の**誕**を會州刺史と為す。

■［王僧綽とその一党を誅殺］**劭**は**文帝**の巾箱（機密書類箱）及び**江湛**の家の書疏を料檢し，**王僧綽**が啟する所の饗士並びに前代の故事を得，甲申（１１日），**僧綽**を収め，之を殺す。（僧綽は享年は 31。僧綽の罪に連座して、門客の太学博士賈匪之・奉朝請司馬文穎・建平国常侍司馬仲秀らも処刑された。孝武帝が即位すると、僧綽は散騎常侍・金紫光禄大夫の位を追贈された。諡は愍侯といった。子の王倹が後を嗣いだ。）**僧綽**の弟の**僧虔**は司徒の左西屬（司徒府の左西曹の屬）為り，親する所は鹹之に逃げるを勸め，**僧虔**は泣いて曰く、

「吾が兄は忠貞を以て奉國し，我を慈愛を以て撫で，今日之事は，及ばれざるを苦しむ耳。若し同じく九泉に歸するを得れば，猶ほ羽化（登仙）せんのごとき也。」

劭は因りて北第（臺城の北に第を並べる）の諸王侯を誣（おとしめる）いて，

「**僧綽**とともに謀反を謀る」

と雲い，長沙の悼王の**瑾**、**瑾**の弟の臨川の哀王の**燁**、桂陽の孝侯の**覬**、新喩の懐侯の**玠**を殺す，皆な**劭**が素より惡む所也。**瑾**は**義欣**之子、**燁**は，**義慶**之子、**覬**、**玠**は，**義慶**之弟の子也。

■［武陵王駿と沈慶之の即時反撃計画動く］**劭**は密かに**沈慶之**に手書を與え，武陵王の**駿**を殺さ令めんとする。**慶之**は**王**に見えるを求め，**王**は懼れ，疾を以て辭す。**慶之**は突入し，以て**劭**の書を**王**に示し，**王**は泣いて内に入りて母（路淑媛）と訣れんことを求め，**慶之**は曰く、

「下官は**先帝**の厚恩を受け，今日之事，唯だ力を是を視るのみ。**殿下**は何ぞ之を疑わる見や深きや！」

王は起ちて再拜して曰く、

「家國の安危は，皆な將軍に在り。」

慶之は即ち内外に命じて兵を勒さしむ。府の主簿の**顏竣**は曰く、

「今四方は未だ義師之舉を知らず，**劭**は天府（建康）を據有す，若し首（武陵王駿）尾（諸方の鎮）相い應じざれば，此は危き道也。宜しく諸鎮の協謀を待ち，然る後に事を舉ぐべし。」

慶之は聲を厲して曰く、

「今大事を舉げるべし，而るに黄頭の小兒（生まれたての嬰児）は皆な參預を得れば，何んぞ敗れざらんを得

るや！宜しく斬りて以て衆に徇(あまね)くすべし！」
王は**竣**をして**慶之**に拜謝せ令め，**慶之**は曰く、
「君は但だ當に筆札（机上）の事を知る耳！」
是において**慶之**の處分に專ら委ねる。旬日之間，內外は整辦し，人は以て神兵と為す。**竣**は，**延之**（時に建康にあり、謝霊運と共に文義で有名）之子也。
■［武陵王の戒嚴］庚寅（１７日），**武陵王**は戒嚴を衆に誓う。**沈慶之**を以て府の司馬を領せしむ。(7-325p)襄陽太守の**柳元景**、隨郡太守の**宗慤**を咨議參軍と為し，中兵を領せしむ（前駆の任）。江夏內史の**朱修之**をして平東將軍に行なわしむ。記室參軍の**顏竣**を咨議參軍と為し，錄事を領さしめ，兼ねて內外を總べしむ。咨議參軍の**劉延孫**を以て長史、尋陽太守と為し，留府の事を行わしむ。**延孫**は，**道產**（襄陽に鎮す、124 巻 19 年に政績あり）之子也。
■［南譙王の義宣及び臧質は武陵王に応ず］南譙王の**義宣**及び**臧質**（臧質の門生の師顗が文帝死去の事情を臧質に報告するとその情報を劉義宣に伝え、さらに雍州祭酒従事の田穎起を派遣して武陵王劉駿に報告した。）は皆な**劭**の命を受けず，司州刺史の**魯爽**と同時に舉兵して以て**駿**に應ず。**質**、**爽**は俱に江陵に詣りて**義宣**（司州雍州は義宣の監督下）に見みえ，且つ遣使して**王**に勸進す。辛卯（１８日），**臧質**の子の**敦**等の建康に在る者は**質**の舉兵を聞き，皆な逃亡す。**劭**は相い慰め悅ばせんと欲し，下詔して曰く、
「**臧質**は，國戚（高祖の敬皇后の甥）の勳臣にして，方に京輦を贊翼（補佐役、丹陽尹）す，而るに子弟は波迸(はほう)（ほとばしり逃げる）す，良(まこと)に怪しみ歎く可し。（人を）遣わして宣譬(せんひ)（たとえ）せ令めて還らしめ，鹹(みな)本位に復す可し。」
劭は尋(つ)いで錄（収拾）して**敦**を得，大將軍の**義恭**をして訓杖(外戚の子弟に奨励する杖)三十を行わしめて，厚く給して之に賜わる。
■癸巳（２０日），**劭**は**太祖**（史が劭の上る廟號を採用せず、孝武帝が改める廟號を用いるは、劭の弑逆の罪を正して之を断つ）を長寧陵に葬し，謚して**曰景皇帝**とし，廟號を**中宗**とす。
■［武陵王は西陽を出発］乙未（２２日），**武陵王**は西陽を發す。丁酉（２４日），尋陽に至る。庚子（２７日），**王**は**顏竣**に命じて檄を四方に移し，共に**劭**を討た使む。州郡は檄を承け，翕然(きゅうぜん)（一つにまとまる様）と響き應ず。南譙王の**義宣**は**臧質**を遣わして兵を引いて尋陽に詣り，**駿**と同じく下らしめ，**魯爽**を江陵に留める。
■［蕭思話ら続々応ず］劭は兗、冀二州刺史の**蕭思話**を以て徐、兗二州刺史と為し，**張永**を起こして青州刺史と為す。**思話**は歷城より部曲を引いて平城（宋書の彭城が正しい）に還り，兵を起こして以て尋陽に應ず。建武將軍の**垣護之**は歷城に在り，亦た所領を帥いて之に赴く。南譙王の**義宣**は**張永**を版じて冀州刺史と為す。**永**は司馬の**崔勳之**等を遣わしての兵を將して**義宣**に赴かしむ。**義宣**は**蕭思話**と**永**が前憾（蕭思話が張永を獄に繋いだ前歷）を釋さざるを慮り，自ら書を為(つく)りて**思話**に與え，長史の**張暢**（張永の群従なり）をして書を為りて**永**に與えしめ，勸めて相い與に坦懷せしむ。
■［隨王誕の躊躇］隨王**の誕**は將に**劭**の命（會州の刺史の命）を受けんとす，參軍事の**沈正**は司馬の**顧琛**を説いて曰く、
「國家の此の禍は，開闢より未だ聞かず。今江東（浙江の東）の驍(ぎょう)鋭（強い）之衆を以て，大義を天下に唱えれば，其の誰か響き應ぜざらんや！豈に**殿下**をして凶逆に北面して，其の僞寵を受かしむ可きか乎！」
琛は曰く、
「江東は戰を忘れて日久しく，逆順同じならずと雖も，然るに強弱亦た異なり，當に四方に義を舉げる者

有れば**須**つべく，然る後之に應ずるとも，晩しとなさざる也。」（琛の意は順を持って逆を討つと雖も建康は強く江東は弱く、その勢異なりという）

正は曰く、

「天下未だ嘗て父無く君無き之國有らず，寧ろ自ら仇恥に安んじて而して義を餘方に責める可けん乎！(7-326p)今、**正**は弒逆冤酷（酷い冤罪）を以て，義は天を同じくせず（続は義は共に天を載かず），舉兵之日は，豈に必ず全くするを求めん邪！**馮衍**に言有り。『大漢之貴臣は，將に、荊齊之賤士（申包胥が秦に赴き救いを求め、以て荊王を存し、孫賈が淖齒を殺して齊を存せしを謂う）に如かず乎！』況んや殿下は義は臣子を兼ね，事は實に國家なる者を哉！」

琛は乃ち**正**と共に入りて**誕**に說き，**誕**は之に從う。**正**は，（沈）**田子**（武帝に従いて関に入り功有り、後に王鎮悪を殺すを以て誅を受ける）之兄の子也。（王玄謨は益州刺史となる。武陵王劉駿が劉劭を討つべく起兵、玄謨は劉駿に従い、済南郡太守の垣護之に兵を与えて派遣。6 月、徐州刺史に任ず。）

■［劭は諸王大臣を城内に人質に］**劭**は自ら謂うに素より武事を習い，朝士に語りて曰く、

「卿等は但だ我を助けて文書を理めよ，意を戎旅に措く勿かれ。若し寇難有れば，吾は自ら之に當たり，但だ賊虜の敢えて動かざるを恐る耳。」

四方に兵起こるを聞くに及び，始めて憂懼し，戒嚴し，悉く下番（非番）の將吏を召し，淮南の岸の居民を北岸に遷し（秦淮河の南岸は新亭石頭の来路にあたり、北岸は台城、秦淮河の防衛線を固める），盡く諸王及び大臣を城内に聚め，江夏王の**義恭**を移して尚書の下舍に處さしめ，**義恭**の諸子を侍中の下省（神虎門外）に分けて處く。

■［武陵王は尋陽を發す］夏，四月，癸卯朔（１日），**柳元景**は寧朔將軍の**薛安都**等十二軍を統べて湓口（江西省潯陽道徳化県、現・九江市柴桑区）を發し，司空（南譙王義宣）中兵參軍の**徐遺寶**は荊州の衆を以て之に繼ぐ。丁未（5 日），**武陵王**は尋陽（江西省潯陽道九江県の西南、現・九江市潯陽区）を發し，**沈慶之**は中軍を總べて以て從う。**劭**は妃の**殷氏**を立てて皇后と為す。

■［武陵王の檄書に劭怒る］庚戌（８日），**武陵王**の檄書は建康に至り，**劭**は以て太常の**顏延之**に示して曰く、

「彼は誰の筆ぞ也？」

延之は曰く、

「**竣**之筆也。」

劭は曰く、

「言辭は何ぞ是に至るか！」

延之は曰く、

「**竣**は尚ほ老臣をも顧みず，安んぞ能く陛下を顧みるや！」

劭は怒りは稍解く。悉く**武陵王**の子を侍中の下省に，南譙王の**義宣**の子を太倉の空舍に拘ず。**劭**は三鎮（雍州荊州江州）の士民の家口を盡く殺さんと欲し，江夏王の**義恭**、**何尚之**は皆な曰く、

「凡そ大事を舉げる者は家を顧みず。且つ多くは是れ驅逼せられる，今忽ち其の室累（家族）を誅すれば，正に彼の意を堅くするに足りるのみ。」

劭は以て然ると為し，乃ち下書して一に問う所無しとする。

■［台城からの出陣を巡る論争］**劭**は朝廷の舊臣の皆な己が用に為さざるを疑い，乃ち**魯秀**及び右軍參軍の**王羅漢**を厚く撫でて，悉く軍事を以て之に委ねる。**蕭斌**を以て謀主と為し，**殷沖**をして文符を掌らし

む。**蕭斌**は**劭**に勸めて、

「水軍を勒して自ら上りて決戰すべし，爾ずんば則ち梁山（安徽省安慶道和県の南、現・馬鞍山市和県）に保據すべし」

と。江夏王の**義恭**は以えらく南軍は倉猝（にわかな倉、急ごしらえ）にして，船舫は陋小，水戰には利あらず，乃ち策を進めて曰く、

「賊の**駿**は小年にして未だ軍旅を習わず，遠來して疲弊し，宜しく逸を以て之を待つべし。今遠く梁山に出れば，則ち京都は空弱にして，東軍（隨王誕の軍）は虛に乘り，或いは能く患と為らん。若し力を分けて兩つに赴けば，則ち兵は散じ勢いを離れん。銳を養いて機を待ち，坐して彀を觀るに如かず。(7-328p)南岸を割り棄て，石頭を柵斷するは，此れ先朝の舊法（晉の明帝が王含を防ぎ、武帝が盧循を防ぐ用兵）にして，賊の破れざるを憂えざる也。」

劭は之を善しとする。**斌**は厲色して曰く、

「南中郎（駿は南中郎將江州刺史）は二十の年少（年 24）にして，能く此くの如き大事を建てて，豈に復た量る可けんや！三方（雍州荊州江州）は惡を同じくして，勢いは上流に據る。**沈慶之**は甚だ軍事に練じ（蕭斌と沈慶之は碻磝で共に戰う），**柳元景**（蠻を討つ功）、**宗慤**（林邑を討つ功）は屢々嘗て功を立つ。形勢此くの如く，實に小敵に非ず。唯だ宜しく人情の未だ離れざるに及ぶべし，尚ほ力を決して一戰す可し。台城に端坐して，何んに由りて久しきを得るや！今主相は，鹹戰意無ければ，豈に天にあらざる也！」

邵は聽かず。或るは**劭**に、

「石頭城を保つべし」

を勸め，**劭**は曰く、

「昔の人石頭城を固める所以は，諸侯の勤王を俟つ耳。我若し此れを守れば，誰か當に救わるべきや！唯だ應に力戰して之を決すべきのみ；然からざれば，克たず。」（台城は援軍が無ければ守れない）

日日自ら出でて軍を行り，將士を慰勞し，親ら都水（官名）を督して船艦を治む。壬子（１０日），淮の南岸の室屋、淮の內の船舫を焚き，悉く民家を驅りて水北（秦淮水の北）に渡らしむ。（防衛上、台城からの見通しを良くするための作業）

■<u>［太尉司馬の寵秀之の逃亡の大震］</u>子の**偉之**を立てて皇太子と為す。始興王の**濬**の妃の父の**褚湛之**を以て丹陽尹と為す。**湛之**は，**裕之**（115 巻晉の安帝義熙 6 年にあり）之兄の子也。**濬**を侍中、中書監、司徒、錄尚書六條事と為し，南平王の**鑠**に開府儀同三司を加え，南兗州刺史の建平王の**宏**を以て江州刺史（武陵王に代えて）と為す。太尉の司馬の**寵秀之**は石頭より衆に先んじて南に奔り，人情は是（寵秀之は軍務を掌る）に由りて大いに震える。營道侯の**義綦**を以て湘州刺史と為し，**檀和之**を雍州刺史（臧質に代えて）と為す。

■<u>［王僧達も武陵王の檄に応ず］</u>癸丑（１１日），**武陵王**は鵲頭（宣城県の界、安徽省蕪湖道銅陵県、現・銅陵市義安区）に軍す。宣城（安徽省蕪湖道宣城県、現・宣城市宣州区）太守の**王僧達**は**武陵王**の檄を得て，未だ從う所を知らず。客が之に說いて曰く、

「今方に彀逆（逆のきざし）は滔天（天までみなぎる、勢い盛ん）し，古今未だ有らず。君の計を為すに，義師之檄を承け，傍郡に移告するに若くは莫し。苟くも心有る在れば，誰か響應せざらん！此くは上策也。如るに其れ能わずば，躬ら義に向かう之徒を帥い，水陸之便を詳擇（詳しく選ぶ）し，身を致して南に歸す可くは，亦た其の次也。」

僧達は乃ち侯道（邊上の警急を伺候するの道）より南奔し，**武陵王**に鵲頭にて逢う。**王**は即ち以て長史と為す。**僧達**は，**弘**（武帝文帝に歷事）之子也。**王**は初め尋陽を發するや，**沈慶之**は人に謂いて曰く、

「**王僧達**は必ず來たりて義に赴かん。」
人は其の故を問う，**慶之**曰く、
「吾は其の先帝の前に在るを見るに、議論を開張し，意を執（続は向）りて明決す。此くを以て之を言えば，其の必ず至る也。」
■［柳元景と薛安都は秦淮河に進出］**柳元景**は舟艦が堅からずを以て，水戦を憚れ，乃ち道を倍して兼行し，丙辰（１４日），江寧（県、現・南京市江寧区）に至り歩いて上り，**薛安都**をして鐵騎を帥いて兵を淮上（秦淮河）に曜せしめ，書を朝士に移し，為に逆順（道理に背いて）を陳べる。(7-329p)
■［吳興太守周嶠は丘珍孫に殺される］**劭**は吳興太守の汝南の**周嶠**に冠軍將軍を加える。隨王**の誕**の檄も亦た至り，**嶠**は素より恇怯（臆病）にして，惑い回りて從う所を知らず。府の司馬の**丘珍孫**は之を殺し，郡を舉げて**誕**に應ず。
■［武陵王の病気と顔竣の介護専決］戊午（１６日），**武陵王**は南洲（姑孰に属す、安徽省蕪湖道當塗県、現・馬鞍山市当塗県）に至り，降者は相い屬く。乙未（１７日），軍は溧洲にあり。**王**は尋陽を發してより，疾有り，將佐を見る能わず，唯だ**顔竣**のみが臥內（病臥の部屋）に出入りし，**王**を膝に擁し，親しく起居を視る。疾は屢々危篤にして，咨稟（諮問稟議）に任じず，**竣**は皆な專決す。軍政之外は，間々に文教書の檄を以て，遐邇（遠近）に應接し，昏曉（夜明けもわからず）臨哭（泣きくらす）し，一人に出るが若し。是くの如く累旬（尋陽発から江寧到着までの二十日）にして，舟中の甲士より亦た王之危疾を知らざる也。
（劉駿が北中郎将に転じると、顔竣は北中郎府主簿となった。北魏の太武帝が彭城から退却し、互市を求めてくると、顔竣は北魏との和親を無益なものとして退けるよう主張した。劉駿が南中郎将・江州刺史として尋陽に駐屯すると、顔竣は南中郎記室参軍に転じた。劉駿が即位すると、顔竣は侍中に任じられた。まもなく左衛将軍となり、散騎常侍の位を加えられた。建城県侯に封じられた。）

【劭軍崩壊、武陵王即位】

■［柳元景は劭の軍勢を撃滅］癸亥（２１日），**柳元景**は潜かに新亭に至り，山に依りて壘を為す。新しい降者は皆な**元景**に速かに進むを勸め，**元景**は曰く、
「然らず。理は順なるも恃み難し，同惡は相い濟い，輕々しく進みて防無きは，實に寇の心を啟く。」
■**元景の**營は未だ立たず，**劭**の龍驤將軍の**詹叔兒**は覘いて之を知り，**劭**に出戰を勸めるも，**劭**は許さず。甲子（２２日），**劭**は**蕭斌**をして步軍を統べ使め，**褚湛之**と**魯秀**に水軍を統べしめ，**王羅漢**、**劉簡之**等精兵は合わせて萬人にて，新亭の壘を攻め，**劭**は自ら朱雀門に登りて督戰す。**元景**は軍中に宿令（未だ戰わざる日に先立ちて命ずる）して曰く、
「鼓繁ければ氣は衰え易く，叫ぶに數々すれば力は竭え易し。但だ銜枚（轡を含む、黙って）して疾く戰い，吾が鼓聲を一に聽くべし。」
劭の將士は**劭**の重賞を懷い（恩賞目当てに），皆な殊に死戰す。**元景**は水陸に敵を受け，意氣は彌々強く，麾下の勇士は，悉く遣わして出で鬥わしめて，左右には唯だ數人を留めて（号令を）宣傳す。**劭**の兵勢は克つに垂として，**魯秀**は退きの鼓を擊ち（早撃ちは進軍、遅撃ちは退却、誤って撃つ），**劭**の衆は遽に止まる。**元景**は乃ち壘を開き鼓噪し以て之に乘じ，**劭**の衆は大きく潰れ，淮に墜ちて死する者甚だ多し。**劭**は更に餘の衆を帥いて，自ら來りて壘を攻め，**元景**は復た大いに之を破り，殺傷する所は前の戰いに過ぎ，士卒は爭って赴き馬澗に死し，澗は之が為に溢れる。**劭**は退く者を手ずから斬るも，禁ずる能わず。**劉簡之**は死し，**蕭斌**は創を被り，**劭**は僅かに身を以て免れ，走りて宮に還る。**魯秀**、**褚湛之**、**檀和之**は皆な南に奔る。
■丙寅（２４日），**武陵王**は江寧に至る。丁卯（２５日），江夏王の**義恭**は單騎で南に奔る。**劭**は（始興王の

劉濬を西省に派遣し）**義恭**の十二子を殺す。

■［劭は茫然自失］劭、濬は迫まるを憂えて計無く，輦（天子の乗る車）を以て**蔣侯**（蔣歆、字は子文）神の像を迎えて宮中に置き，稽顙（頭をぶつけて跪き拝む）して恩を乞い，**拝**して大司馬と為し，鐘山王に封じる。**蘇侯神**（蘇峻、東晋の武将、328 年没、反乱を起こす）を拝して驃騎将軍と為す。**濬**を以て南徐州刺史と為し、南平王の**鑠**と並んで尚書事を錄せしむ。（劉駿を呪詛する策文は劉鑠が作る）

■［武陵王は新亭にて即位］戊辰（２６日），**武陵王**は新亭（建康の近郊か）に軍し，大將軍の**義恭**は上表して（皇帝位に）進むを勸む。散騎侍郎の**徐爰**は殿中に在りて**劭**を誑かして，雲う、

「自ら**義恭**を追わん」(7-329p)

遂に**武陵王**に歸す。時に王の軍府は草創にして，朝章を曉らず。**爰**は素より諳練する所なり。乃ち**爰**を以て太常丞を兼ね，即位の儀注（儀式の注釈）を撰せしむ。

■己巳（２７日），**王**は**皇帝**に即位し，大赦す。文武に爵一等，（尋陽からの）從軍者には二等を賜す。改めて**大行皇帝**に謚して**文**と曰い，廟號を**太祖**とす。大將軍の**義恭**を以て太尉、錄尚書六條事、南徐州刺史と為す。是の日，**劭**は亦た軒に臨みて太子の**偉之**を拜し，大赦し，唯だ**劉駿**、**義恭**、**義宣**、**誕**は原（許す）の例に在らず。

■庚午（２８日），南譙王の**義宣**を以て中書監、丞相、錄尚書六條事、揚州刺史と為し，隨王の**誕**を衛將軍、開府儀同三司、荊州刺史と為し，**藏質**を東騎將軍，開府儀同三司、江州刺史と為し（散騎常侍も），**沈慶之**を領軍將軍と為し，**蕭思話**を尚書左僕射と為す。

■壬申（３０日），**王僧達**を以て右僕射と為し，**柳元景**を侍中、左衛將軍と為し，**宗慤**を右衛將軍と為し，**張暢**を吏部尚書と為し，**劉延孫**、**顏竣**を並べて侍中と為す。

■五月，癸酉朔（１日），**臧質**は雍州の兵二萬を以て新亭に至る。豫州刺史の**劉遵考**は其の將の**夏侯獻**を遣わして步騎五千を帥いて瓜步に軍せしむ。

■［劭の最後の抵抗、隨王誕の東軍を防ぐ］是より先，**世祖**(武陵王、孝武帝のこと、廟号を記するは宋書などの書き写しのまま)は寧朔將軍の**顧彬之**を遣わして兵を將いて東入し，隨王の**誕**の節度を受けしむ。**誕**は參軍の**劉季之**を遣わし兵を將いて**彬之**と俱に建康に向わしめ，**誕**は自ら西陵（浙江省會稽道蕭山県、現・杭州市蕭山区）に頓し，之を後繼と為す。**劭**は殿中將軍の**燕欽**等を遣して之を拒ましめ，曲阿（現・鎮江市丹陽市）の奔牛塘（江蘇省蘇常道武進県、現・常州市武進区）において相遇し，**欽**等は大いに敗る。**劭**は是において淮に緣いて柵を樹て以て自ら守り，又た破崗（江蘇省金陵道句容県、現・鎮江市句容市）の方山埭を決し以て東軍を絕つ。時に男丁は既に盡き，婦女を召して供役さす。

■［次々と投降し劭は逃亡できず］甲戌（２日），**魯秀**等は勇士を募り大航（朱雀航）を攻め，之に克つ。**王羅漢**は官軍の已に渡るを聞き，即ち仗を放ちて降り，（秦淮河北岸の）渚に緣った幢隊は次々と以て奔り散じ，器仗鼓蓋は路衢を充たし塞ず。是の夜，**劭**は六門（台城の大司馬、東華、西華、萬春、太陽、永明）を閉守し，門內に於て塹を鑿ち柵を立てる。城中は沸き亂れ，丹陽尹の**尹弘**等文武の將吏は爭いて城を逾えて出て降る。**劭**は輦及び兗冕の服を宮庭にて燒く。**蕭斌**は統ぶる所に宣令して，皆な甲を解かしめ，石頭より白幡を戴きて來り降る。詔して軍門にて**斌**を斬る。**濬**は**劭**に寶貨を載せて海に入りて逃げるを勸め，**劭**は人情が離散するを以て，行を果たさず。

■［劭、濬、嚴道育、王鸚鵡の殺害］乙亥（３日），輔國將軍の**朱修之**は東府に克ち，丙子（４日），諸軍は台城に克ち，各々諸門に由り入りて殿庭に會し，**王正見**を獲て，之を斬る（臧質は広莫門から建康に入り、薛安都や程天祚らは南掖門から入城して、太極殿で合流）。**張超之**は走りて合殿の御床之所に至る。軍士の殺す所と為り，

腸を刳り心を割き，諸將は其の肉を臠（切り刻む）し，之に生啖す。**建平**等（拘留中の）七王は號哭して俱に出ず。**劭**は西垣を穿ち，武庫の井の中に入り，隊の副（官）の**高禽**は之を執る。

劭は曰く、

「天子は何くに在るか？」

禽は曰く、

「近くの新亭に在る。」

殿前に至り，**臧質**は之を見て慟哭し，**劭**曰く、(7-330p)

「天地の覆載（恩恵）せざる所，丈人（年寄り・岳父、臧質は武敬皇后の甥なので劭は丈人と呼ぶ）は器を見るに何と為すか？」

又た**質**に謂って曰く、

「劭は啟して遠くに徙ると為すを得るが可か不か？」

質は曰く、

「**主上**は近くの航南（大航の南）に在り，自ら當に處分有らん。」

劭を馬上に縛して，軍門に防送（護送）す。時に傳國の璽を見ず，以て**劭**に問い，**劭**は曰く、

「**嚴道育**の處に在り。」

就きて取り，之を得る。**劭**及び四子を牙下に斬る。**濬**は左右數十人を帥いて南平王の**鑠**を挾んで南に走り，江夏王の**義恭**に越城にて遇う。

濬は下馬して曰く、

「南中郎は今何の作す所か？」

義恭は曰く、

「**上**は已に萬國に君臨す。」

又た曰く、

「虎頭は來りて晩きこと無きを得る乎？」

義恭は曰く、

「殊に當に晩きを恨むべし。」

又た曰く、

「故に當に死せざるべき邪？」

義恭は曰く、

「行闕（天子の行宮）に詣りて罪を請う可し。」

又た曰く、

「未だ審ならずして猶を疑うに能く一職を賜りて自ら效さんや不や？」

義恭は又た曰く、

「此れは未だ量る可からず。」

勒して俱に輿に歸り，道において之，及び其の三子を斬る。**劭**、**濬**父子の首を並べて大航にて梟し，市にて屍を暴す。**劭**の妃の**殷氏**及び**劭**、**濬**の諸女、妾媵，皆な獄にて死を賜う。**劭**の居する所の齋を汚潴（臣が君を殺し、子が父を殺せば、これを殺して敬せず。その室を壊して水溜まりにすること）とする。**殷氏**は且に死せんとし，獄丞の**江恪**に謂って曰く、

「汝の家の骨肉は相い殘う，何を以て無罪の人を枉（無実の罪）殺すか？」

恪は曰く、
「皇后を受拝す，罪に非ざるは何ぞや？」
殷氏は曰く、
「此れは權(かり)の時耳，當に**鸚鵡**を以て后と為すべし。」
褚湛之の南に奔る也，**濬は**即ち**褚妃**と離絶し，故に誅を免ず。**嚴道育**、**王鸚鵡**は並んで都街にて鞭殺され，屍を焚きて，灰を（揚子）江に揚げる。**殷沖**、**尹弘**、**王羅漢**及び淮南太守の**沈璞**（頻りに濬の参左となり于湖を守り義帥を迎えず誅殺される）は皆な伏して誅す。

【孝武帝の政治体制確立】

■［功労の諸侯に謚す］庚辰（８日），（戒）嚴を解き，辛巳（９日），**帝**は東府に如き，百官は罪を請い，詔して之を釋す。甲申（１２日），**帝**の母の**路淑媛**（淑媛とは魏の文帝の制する九卿並の九嬪）を尊して**皇太后**と為す。**太后**は，丹陽の人也。乙酉（１３日），妃の**王氏**を立てて**皇后**と為す。后父の**偃**は，**導**（東晋の元臣王導）之玄孫也。戊子（１６日），**柳元景**を以て雍州刺史と為す。辛卯（１９日），**袁淑**（難に会って死す）に追贈して太尉と為し，謚して忠憲公とす。**徐湛之**を司空と為し，謚して忠烈公とす。**江湛**を開府儀同三司と為し，謚して忠簡公とす。**王僧綽**を金紫光祿大夫と為し，謚して簡侯とす。壬辰（２０日），太尉の**義恭**を以て揚、南徐二州刺史と為し，位を太傅に進め，大司馬を領せしむ。
■［何尚之父子並んで權要］初め，**劭**は尚書令の**何尚之**を以て司空と為し、尚書令を領せしめ，子の征北長史の**偃**を侍中と為し，父子並びて權要に居る。**劭**の敗るるに及び，**尚之**の左右は皆な散り，自ら黄閣（旧制に三公の聽事に置く）を洗う。**殷沖**等は既に誅せられ，人は之が為に寒心す。**帝**は**尚之**、**偃**が素より令譽有り，且つ**劭**の朝に居りて智を用いて將迎し時に，全脱（三鎮の士民の家口の救助）有るを以て，故に特に之を免じ，復た**尚之**を以て尚書令と為し，**偃**を大司馬の長史と為し，任遇を改める無し。(7-331p)
■［袁叔等四家に稟祿を給ふ］甲午（２２日），**帝**は初寧に、長寧陵に謁す。**卜天與**に益州刺史を追贈して，謚して壯侯とし，**袁叔**等四家と與に，長く稟祿を給ふ。**張泓之**等に各々郡守を贈る。戊戌（２６日），南平王の**鑠**を以て司空と為し，建平王の**宏**を尚書左僕射と為し，**蕭思話**を中書令、丹陽尹と為す。
六月，丙午（５日），**帝**は宮に還る。
■［臧質と柳元景の微妙な関係］初め，**帝**の西陽蠻を討つ也，**臧質**は**柳元景**をして兵を將いて之に會さ使む。**質**が兵を起こすに及びて，南譙王の**義宣**を奉じて主に為さんと欲し，潜かに**元景**をして帥いる所領を西に還さ使む，**元景**は即ち**質**の書を以て**帝**に呈し，其の信（使者）に語りて曰く、
「**臧**冠軍（冠軍將軍として襄陽に鎮す）は當に是れ未だ殿下の義舉を知らざる耳。方に應(まさ)に逆（賊）を伐つべし，西に還る容(べ)からず。」
質は此くを以て之を恨む。**元景**が雍州と為るに及び，**質**は其の荊、江の後患と為るを慮り，建議して
「**元景**は當に爪牙と為り，宜しく遠くに出すべからず。」
帝は其の言を違えるを重(はばか)りて，戊申（７日），**元景**を以て護軍將軍と為し，石頭戍事を領さしむ。
■［一連の戦後処理と人事］己酉（８日），司州刺史の**魯爽**を以て（使持節・都督豫司雍秦并五州諸軍事・左將軍）南豫州刺史と為す。（寿陽に駐屯）庚戌（９日），衛軍司馬の**徐遺寶**を以て兗州刺史と為す。
■庚申（１９日），有司に詔して論功行賞し，**顔竣**等を封じて公、侯と為す。
■辛未（３０日），南譙王の**義宣**を徙して南郡王と為し，隨王**の誕**を竟陵王と為し，**義宣**の次子の宜陽侯の**愷**を立てて南譙王と為す。（王僧達を尚書右僕射に任ず。使持節・南蛮校尉、征虜將軍の号も加える。南郡王劉義宣が江陵で留

任を求め、僧達は南蛮校尉に留任、赴任もしなかった。）

■（六月）閏月，壬申（１日），領軍將軍の**沈慶之**を以て南兗州刺史と為し，盱眙に鎮ぜしむ。癸酉（２日），**柳元景**を以て領軍將軍と為す。（沈攸之は江夏王劉義恭の下で太尉行参軍、平洛県五等侯の爵を受く。劉義恭に従い大司馬行参軍に転ず。）

●乙亥（４日），魏の太皇太后の**赫連氏**は殂す。

■丞相の**義宣**は內任及び子の**愷**の王爵を固辭す。甲午（２３日），更に**義宣**を以て荊、湘二州刺史と為し，**愷**を宜陽縣王と為し，將佐以下並んで秩を加賞す。竟陵王の**誕**を以て揚州刺史と為す。

（王僧達は護軍将軍に任じられ、才能自負、護軍将軍の地位に不満、徐州刺史の任を求めるもはたさず。三たび孝武帝に訴え、不興を買い、８月征虜将軍・呉郡太守に出す。呉郡の西台寺に富裕沙門が多く、主簿顧曠を派遣して沙門の竺法瑤を人質、数百万銭を入手。）

■［倹約令］秋，七月，辛丑朔（１日），日に之食有り。甲寅（１４日），詔して直言を求む。辛酉（２１日），詔して細作並びに尚方・雕文・塗飾を省く。貴戚が利を競う，悉く皆な禁絕す。

■［周朗は倹約令の不備を上疏す］中軍錄事參軍の**周朗**は上疏す，以て為す、

「毒の體に在るや，必ず其の緩する處を割る。歷下（歷城、山東省濟南道歷城県、現・済南市歷城区）、泗間（澎城・湖陸、現・江蘇省徐州市）は，戍を守るに足らず。議者は必ず以て胡（北魏）が衰えて避くるに足らずと為し，而して我（宋朝）の病は胡より甚だしきを知らず。今空しく孤城を守り，徒らに財役を費やす。虜（北魏）は但だ輕騎三千を發し，更互に出入し，春に來て麥を犯し**(7-332p)**，秋に至りて禾を侵さ使めば，水陸の漕輸は，居然として復た絕す（北虜至れば澎城への補給はあきらめる）。賊に於いては勞せずして邊（境）は已に困ず，二年に至らずして，卒は散じ民は盡くし，足を蹺げて待つ可き也。今人羊を以て狼を追い、蟹を以て鼠を捕えざるを知る，而るに重車弱卒に肥馬悍胡を相い逐わ令め，其の濟す能わざるは固く宜しきなり。又，三年之喪は，天下の喪に達すなり。漢氏（景帝の薄葬令）は其の臣に節すは則ち可とし，其の子に薄くするは則ち亂れる也。凡そ法は古を變じ而して情に刻なること有れば，則ち能く順うもの莫し焉。禮を敗り而して身に安んじるに至るや，必ず遽に之を奉ず。今**陛下**は大孝を以て基を始め，宜しく斯の謬（過ち）を反すべし（三年喪を行うべし）。又，天下を舉げて以て一君に奉ず，何の給らざるを患えんや？一體の炫金（メッキ）は，百兩に及ばず，一歲の美衣は，數襲に過ぎず。而るに必らず寶を收めて櫝（箱）を連らね，服を集めて笥に累し，目は豈に常に視にや，身は未だ時に親しまず，是れ櫝寶を帶び、笥衣を著る也，何の蠹蠹（ただれ虫食い、無益に費やす）之劇しく，鄙を惑わす之れ甚だしき邪！且つ細作始めて幷せ，以て儉節と為す。而るに市造の華怪（華麗奇怪なもの）は，即ち民に傳わる。此くの如きは，則ち遷す也，罷に非らざる也。凡そ闕の庶民は制度は日々に侈り，車馬を見れども貴賤を辯ぜざり，冠服を視て尊卑を知らず。尚方（官営工房）は今一物を造れば，小民は明（日）は已に睥睨（よこにらみ）す。宮中が朝に一衣を製すれば，庶家は晚には已に裁學す。侈麗の源は，實に宮闈を先にす。又た，官を設ける者は宜しく官は事に稱いて立て，人は官に稱いて置くべし。王侯は識未だ務めに堪えざるは，應に強いて仕えさせず。且つ**帝**の子は未だ官あらずとも，人誰をか賤と謂うや？但だ宜しく詳らかに賓友を置き，茂めて正人を擇び，亦た何んぞ必ずしも長史、參軍、別架、從事を列し，然る後に貴としと為すべき哉！又た，（世）俗は好みて毀りを以て人を沈め，其の毀を致す所以を察するを知らず。譽を以て人を進めて，其の譽を致す所以を察するを知らず。毀徒が皆な鄙しければ，則ち宜しく其の毀らるる者を（抜）擢すべし。譽黨が悉く（凡）庸ならば，則ち宜しく其の譽められる者を退くべし。此くの如く，則ち毀譽は妄ならず，善惡を分けるかな。凡そ世は事を言う有らざる無く，時に令を下す有らざる無し。然るに昇平は至らず，昏危が相い繼ぐは，何んぞ

哉？令を設ける之の本が實に非らざる故也。」
書を奏し，旨に忤い，自ら解いて職を去る。**朗**は，**嶠**（周嶠、丘珍孫に殺される）之弟也。
■［**倹約令は民意に適うとす**］侍中の**謝莊**は上言す、
「詔に云う、『貴戚の利を競うは，悉く皆な禁絶す。』此くは實に民聽に允愜（まことに適う）す。若し犯違有れば，則ち應に制に依りて裁糾（裁断糾明）すべし。若し法を廢して恩を申べれば，便ち明詔は既に下りて而して聲實乖爽（背き違う）すと為る也。臣愚は謂うに大臣の祿位に在る者は，尤も民と利を爭うは宜しからず。不審なり此の詔に在る得る可きや不やは？」
莊は，**弘微**（元嘉の初めに進用される）之子也。
■［**太祖之制を變易して宋は衰え始める**］**上**は多く**太祖**之制を變易し，郡縣は三周（元嘉は六年）を以て滿と為し，宋の善政，是に於いて衰を乎ぶ。
●［**濮陽王閒若文・永昌王仁謀反誅殺**］乙丑（２５日），魏の濮陽王の**閒若文**、征西大將軍の永昌王の**仁**は皆な謀叛に座し，**仁**は長安にて死を賜い，**若文**は誅に伏す。
■［**南平穆王鑠を毒殺**］南平穆王の**鑠**は素より才能に負け，意は常に**上**を輕んじる。又た太子の**劭**の任ずる所と為り，出で降るも最も晩し。**上**は潛かに人をして之を毒せ使め，己巳（２９日），**鑠**は卒し，司徒を贈り，商臣之諡（楚の世子商臣は君父を殺して自立し、卒して後諡を穆とす）を以て之に諡す。
■［**南海太守の蕭簡の反乱**］南海太守の**蕭簡**は廣州に據りて反す。**簡**は，**斌**之弟也。詔して新南海太守の南昌の**鄧琬**、始興太守の**沈法系**に之を討たしむ。**法系**は，**慶之**之從弟也。**簡**は其の衆を誑して曰く、
「台の軍は是れ**劭**の遣わす所の賊なり。」
衆は之を信じ，之が為に固く守る。**琬**は先に至り，止だ一攻道を為る。**法系**は至り，曰く、
「宜しく四面より並びて攻むべし。若し一道を守れば，何の時にか拔く可きや！」
琬は從わず。**法系**は曰く、
「更に（期日を）五十日を相い申（宋書沈慶之伝には守とす）べん。」
日盡くるも又た克たず，乃ち之に從う。八道より俱に攻め，一日にして即ち之を破る。九月，丁卯（２８日），**簡**を斬り，廣州は平らぐ。**法系**は府庫を封じて**琬**に付けて還る。
■冬，十一月，丙午（８日），左軍將軍の**魯秀**を以て司州刺史と為す。
●辛酉（２３日），**魏主**は信都、中山に如く。
■十二月，癸未（３日），將に東宮を置かんとするを以て，**太子**の率更令等の官を省き，中庶子等は各々減じて舊員之半とす。（東宮の戰力大なるに懲りて半減）
●甲午（２６日），**魏主**は平城に還る。

平成 30 年 10 月 21 日　翻訳開始、原文 8594 字
平成 30 年 12 月 30 日　翻訳終了 16221 字
令和 3 年 1 月 31 日　　微修正　18612 文字　現代地名年表対応
令和 3 年 9 月 1 日　　書下し終了　19096 文字